



2018年4月発行

TEL/FAX:(0265)39-2205 E-MAIL:mtl-muse@osk.janis.or.jp

九州に中央構造線はない？

2016年4月に熊本地震が発生した際、一部のメディアで、「九州で中央構造線が動いた」という報道がなされました。それに対して、2016年5月に、国の地質調査研究機関の研究者から、「九州には中央構造線はない」という意見表明が出されました（斎藤・宮崎、2016）。

中央構造線は、地質の境目となる断層を指し（図1）、日本列島の長い歴史の中でできた地層の古傷です。一方、中央構造線の古傷を使って、現在活動している断層が、中央構造線活断層系です。中央構造線と中央構造線活断層系は、ほぼ並走しているものの、必ずしも一致してはならず、場所によっては数キロメートル離れています。そのため、「九州で中央構造線が動いた」という表現が適切ではありませんでした。

それでは、「九州で中央構造線活断層系が動いた」と訂正すれば良いのか？ということ、そう簡単に事は進まないのが難しいところです。実は、九州では、中央構造線がどこにあるのか？また、そもそもあるのか？ということについて、専門家によって意見がまちまちで、これといった定説がない状態なのです。そのため、「九州に中央構造線がない。したがって中央構造線活断層系もない。」と考え、前述のような意見表明をされた専門家がおられた一方で、「中央構造線活断層系が動いて熊本の地震が起こったかどうかは何ともいえないが、九州には中央構造線があるのではないか？」と考えている専門家もおられました。



図1 中央構造線は領家変成帯の岩石と三波川変成帯の岩石の地質境界(博物館展示パネルより引用)

なぜ九州に中央構造線があるのかないのかははっきりしないのか簡単に理由を記しますと、九州では両側の岩石の分布が限られているうえ、直接接している場所も見つかっていないので、どこに中央構造線が通っているか、判断が難しいためです。大鹿村の北川露頭、安康露頭では、中央構造線の両側に分布する岩石同士、領家変成帯の岩石と三波川変成帯の岩石が直接接して

いるので、中央構造線の位置がはっきり決められるのですが、他の地域では、なかなかそう簡単にはいきません。図1の九州部分を見ますと、領家変成帯の岩は、大分県の東側の国東半島のあたりにあるのみです。一方、三波川変成帯の岩は、佐賀関半島から西にわずかに伸びていますが、途中で地中に埋もれて行方不明になってしまいます。

このような状況下で、専門家同士での議論を深める目的で、2018年3月4日、広島大学にて、地質学会西日本支部シンポジウム「中央構造線と中央構造線活断層系」が開催されました。大鹿村中央構造線博物館スタッフもはるばる広島に聴講に参りました。当日は、さまざまな視点からの意見が飛びかっておりましたが、問題解決までの道のりはまだまだ先のように感じられました。(宮崎)

参考文献

斎藤眞・宮崎一博, 2016. 産業後術総合研究所地質調査総合センターwebページ「中央構造線に関する現在の知見—九州には中央構造線はない—」

<https://www.gsj.jp/hazards/earthquake/kumamoto2016/kumamoto20160513-2.html> (最終アクセス 2018.3.12)

おの みち 尾道で寄り道

中央構造線を挟んで日本海側を内帯、太平洋海側を外帯といますが(図1)、内帯側には、花崗岩が広く分布していることが知られています。前述の広島大学でのシンポジウムの帰りに、JR山陽本線に乗車していると、車窓から、花崗岩からなる小高い山があちこちで見られます。日没までまだだいぶ時間もありそうなので、尾道でちょっと途中下車してみることにしました。尾道ラーメンで腹ごしらえをしてから、駅の裏手の急崖を上っていくと、千光寺というお寺があり、周囲を花崗岩の巨石群(写真1, 2)がとり囲んでいました。千光寺境内ならびに千光寺裏手の公園からは、尾道の町並みや瀬戸内海が見渡せました(写真3, 4)。(宮崎)



写真1 鏡岩(千光寺境内)



写真2 御船岩(千光寺境内)



写真3 花崗岩の山に囲まれた尾道の町と尾道大橋

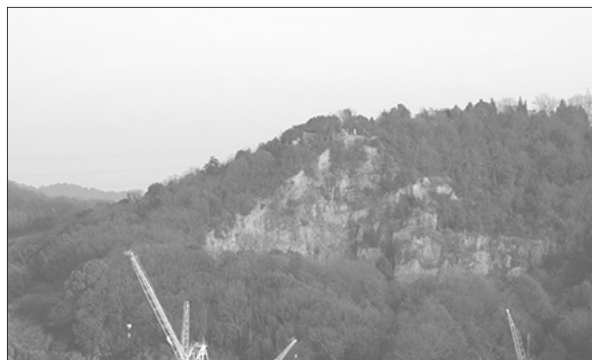


写真4 写真3右側の山肌に花崗岩が露出している